



我以外みな我が師

宮津市市民室長

高村一彦氏



市役所裏手のガラシャ像と

「最初は舞鶴市の職員だったんです。というのも、その当時、古里・宮津市の採用試験がなかったのです。1年後、「割愛」という制度で宮津市役所に移籍したという経歴を持つ。」

いま55歳。市民窓口の最前線の室長になって4年目。良くも悪くも、いわゆる「仕事人間」であるという。

29歳から30歳の時、京都府庁の課に出向した。「超ハードな職場で寝る暇もなかった。公務員の仕事があるなにも過激なものなのかと思いき知らされました」と話す。そこで鍛えられたおかげで、書類一つを作るにしても「頑張ったら頑張った分だけの見返りがあると実感した。仕事に対する『妥協点』が格段に上がった」といい、その時の体験が公務員としての原点だ。

ハードルが高くて…

長身で背筋もピンと伸び、かつては文学青年だったという高村氏は、なかなかのダンディーである。「ところで健康法は何かありますか」と尋ねると、申し訳なさそうに

「まったく何もしていません」。「酒少々とたばこが趣味といった人間です。この欄は私にとつてあまりにもハードルが高いようで…。たばこは、もちろんやめたいという気持ちにはあり、何回か挑戦はしたんですがねえ。人間ドッグですか？こちらを受診するのがちよつと怖くて…」。愛煙家のその気持ち、よく分かります。ここは、20年以上も愛妻弁当を作ってくれている看護師の奥さんとじっくりと話合つてもらふことにしよう。

短所でなく長所を

「自分は創造的な人間ではなく、与えられた仕事や役割を果たすタイプです」と自己分析しながら、「ただ組織人、上司としては、職員の短所ではなく長所を見抜く力を絶えず持とうと努力しています」。仕事への情熱と思いは熱い。

我以外みな我が師。―自分以外の人や物はすべて自分の先生であるという意味らしい。「自戒の念を込めて好きな言葉です」